

# 森を活かし、森と人をつなぐために

## 旭川市 NPO法人もりねっと北海道

旭山動物園から東へ車で10分ほど。廃校になった中学校（旧旭川第一中学校）の保健室に、もりねっと北海道の事務所がある。廃校利用のために旭川市教育委員会が貸し出していた一室を借り受け、2011年5月からこの場所を事務所としている。校舎2階のスペースは、クラフト教室としても利用されている。

グラウンドだったスペースも利用できるうえ、駐車場も広い。「元の中学校の場所」と説明すれば誰でもその場所が分かるため、事務所としては申し分ない。今回取材に訪れたときも、「中学校の保健室ですから」と説明され、一瞬驚いたが、現地に着くとその利便性に納得できた。この取材中にも、実際に薪を買いたいと直接事務所にやって来た地元男性もいた。

薪をいくらで提供しているのか、もりねっと代表の陣内雄さん（46）に尋ねると、

「うちは薪や原木を売るのが目的ではないですから、別に利益にならなくてもいいのです。ここの目的は、森を活かし、森の恵みを人々に知ってもらうことです。その一環として、薪の提供も行っ

ているだけですから」

陣内さんは、熱く語り始めた。



旧旭川第一中学校内にある事務所

### ■ 森は持続可能な生態系

「森を活かす」「森と人をつなぐ」

もりねっとの理念だという。

森はきちんと手入れすれば、長期間にわたって恵みをもたらしてくれる「持続可能な生態系」であり、「おすそ分けをもらう気持ち」で資源を活用する。これが「森を活かす」こと。また、多くの市民が森について知り、森林と林業を紹介して、フィールドを体験してもらう場を作ることこそが、「森と人をつなぐ」こと。

森をそのままにしておく場所と、森の

手入れをしてその恵みを受け取る場所を  
しっかり区分けしなければならないと、  
陣内さんは強調する。

陣内さんは、1966年生まれ。札幌南高  
校卒業後、東京芸術大学で建築を学んだ。  
東京の設計事務所に勤めたが、もともと  
持続可能な林業について関心を持ってい  
たことから、東京での仕事に矛盾を感じ  
て退職。ハンドメイドで家を建てたり、  
道内の林業を視察したりした。1993年か  
ら下川町の森林組合に勤め、2000年か  
ら2006年まで同組合で木材の加工販売に関  
する業務に携わった。

林業について、知れば知るほど、日本  
の森林は危機的な状況にあると、痛感す  
るようになったという。

「木材価格の低迷や山林所有者の高齢  
化、後継者の減少などから、手入れが行  
き届かない森林が増えています。そうし  
た森を放置すれば、土砂崩れや水害、濁  
水などの危険が高まり、さらには持続可  
能な森林管理、生物多様性の確保、二酸  
化炭素の吸収も出来なくなるのです」

そうした危機感から、陣内さんを中心  
とする森林研究や林業に携わったメンバ  
ーで、「多くの人に、もっと森を知って欲  
しい」、「林業のあり方を考えたい」と、  
2006年12月に特定非営利活動法人「森  
林再生ネットワーク北海道」を設立した。  
2012年3月からは名称を変更、「NPO  
法人 もりねっと北海道」としている。

会の設立直後は、特に苦労したという。

まず、現状を知る必要があると、山主  
を対象にした聞き取り調査を行った。

しかし、「NPO？ 何ですかそれは？」  
相手にされなかった。

「だから、最初は教育大学の学生と一  
緒に、調査に出向いて、学生の勉強のた  
めに、などと口実を設けて会ってもらい、  
実は……我々はこういった団体でして、  
こんな調査もやっております……とい  
った具合に、少しずつ知り合いを増やし  
ていったのです」

陣内さんは苦笑する。

「親しくなれば、いろいろ話を聞かせ  
てもらえました。森林組合にすべて任せ  
ているからといていた山主さんが、や  
っぱり、もっと管理して欲しいとか、収  
入が少ないとか。いわば、眠っていたニ  
ーズを掘り起こしていったのです」

#### ■ 森づくりの支援活動を実施

現在、もりねっとの会員は140人。森  
づくりに関する相談や支援、実際の森の  
運営、そして森を人々に知ってもらう活  
動を行っている。

森の用途は、木材生産だけでなく、子  
供の遊び場を作りたい、森の中に家を建  
てたいなどいろいろあり、そうした人の  
ために森の活用方法から手入れの仕方な

ど、それぞれに合ったやり方を提案する。さらに、森にやさしい林道の作り方や、林業機械を使った集材方法も研究、森づくりの支援に役立てようとしている。

また、旭川市と比布町の境界にまたぐ突哨山（とっしょうざん）の指定管理業務を、旭川市から引き受けており、実際に森を運営している。

突哨山は高さ 244mの細長い山。カタクリやエゾエンゴサクなどの大群落があり、自然豊かな場所として地元で親しまれている。以前、ゴルフ場建設計画が持ち上がったことから、市民の間で反対運動が起こり、2000年から公有地化された。もりねっとでは、この山の安全管理や動植物の調査、人工林の手入れのほか、観察会などを行っており、市民と森のよりよい関係づくりに努めている。

そして、森を知ってもらう活動。具体的には、突哨山での間伐体験や、山菜採り（5月）、薪割り体験（7月）、丸太での椅子づくり体験（9月）などのイベントを年間を通して行っている。



厳寒の中突哨山で行われた間伐体験

## ■ 薪ストーブのある暮らしを

森を知ってもらう活動の一環として、最近力を入れているのが薪ストーブのある暮らしを応援する「薪クラブ」の運営である。

薪といえば森林破壊をイメージさせてしまうかもしれないが、森を破壊するような伐採ではなく、森の生態系や資源を守るための伐採であれば、薪は森の恵みともなる。日本には手入れが必要な人工林や込み合った天然二次林が多く、それらを間伐した一部を薪として利用するという。

薪や木材ではなく石油を使用すれば、その利益は産油国に行ってしまうが、薪の代金は森で働く人の賃金や手入れの経費として、「全額地元で回ります」と陣内さん。

「暖房の経費は、アラブの王様にではなく、地元の森と木こりに払おう」といったコンセプトでもある。

ただ、薪ストーブは、灯油ストーブほど手軽ではない。

「灯油のように電話一本で配達されたり、自動運転だったりする手間いらずのストーブとは違います。覚悟が必要です」

スタッフの清水省吾さん（26）は力を込める。清水さんは、コウモリを研究していた学生時代に、そのねぐらとする木

の名前を知るため、もりねっとと関わるようになりスタッフになったという若者。

室内に薪や掃除用具を置く場所や、外に薪をストックするスペースが必要だという。煙突掃除もしなければならぬ。それに、一番重要なのが薪の調達。割ったものを購入すると、ほかの燃料よりも高くなってしまう場合もあり、自分でやらなければならない。

「自分で薪を割るとなると、そのための労力と時間もかかります」

清水さんは、説明する。

だからこそ、薪ストーブに関するノウハウを教えるために「薪クラブ」を設立・運営しているという。クラブ会員に対して、原木を供給するほか、「自宅で薪を割ったり積んだりする場所がない」という人にスペースを提供したり、「チェーンソーの使い方が分からない」という会員のために講習会を開いたりしている。



スタッフの皆さん。左から清水さん、陣内さん、石黒さん

## ■ 森を有効に活用すべき

「森林保全に関することは、一般的に『総論は賛成！』です。でも各論は『分かりません』なのです。大部分の人が、森林について、何をどうすれば良いのか分かっていないのが実情です。だからこそ、裾野を広げて子供たちにもっと教え、森のことが分かる大人になって欲しいのです」

陣内さんは、語気を強めた。

「植樹して『これで良かったね』で、お終いにするのではなく、森があるのだから、有効に活用すべきなのです。それこそが長期的に森を守る方法で、そこに雇用も生まれるのです」

## ■ 連絡先

〒078-1273 旭川市東旭川町米原 517

(旧旭川第一中学校内)

NPO 法人 もりねっと北海道

代表 陣内 雄 (じんのうち たけし)

TEL/FAX 0166-76-2006

Email : jin@morinet-h.org

URL : <http://www.morinet-h.org>